

研究成果情報

令和3年度

多収性品種「ちほみのり」、「つきあかり」、「あきあかね」、「みずほの輝き」の全量基肥施肥		
[要約] 早生品種「ちほみのり」、「つきあかり」の全量基肥施肥では、分施と同等の収量が得られる。晩生品種「あきあかね」、「みずほの輝き」の全量基肥施肥では、分施と同等～やや低いが、720kg/10a の多収が期待できる。		
新潟県農業総合研究所作物研究センター 栽培科	連絡先	TEL 0258-35-0836 FAX 0258-35-0021

[背景・ねらい]

水稻経営体の規模拡大が進む中で、経営資源を有効活用し、所得を確保するためには、家庭用だけでなく、中食・外食等の業務用米を組み合わせて品種構成を見直し、作期を拡大することが有効である。価格の安い業務用米で所得を確保するには、作業の省力化と多収による生産コストの低減が必要である。そこで、業務用米向け多収性品種の全量基肥施肥の実用性を確認する。

[内容]

- 1 早生品種「ちほみのり」、「つきあかり」、晩生品種「あきあかね」、「みずほの輝き」の全量基肥施肥では、分施体系(基肥+穂肥)と同等の窒素量を施用する。早生品種の収量は、分施と同等である。晩生品種では分施と同等～やや低いが、720kg/10a の多収が期待できる(表1)。
- 2 使用する肥料は、生育期間中の葉色(SPAD)値を維持するため、基肥分の速効性肥料に加えて、早生品種ではリニア型 25 日タイプ、晩生品種ではリニア型 40 日タイプが配合された肥料を選ぶ。また、穂肥代替と後期栄養を維持するため、早生品種ではシグモイド型 50 日タイプと 70 日タイプ、晩生品種ではシグモイド型 70 日タイプと 110 日タイプが配合された肥料を選ぶ(表2)。
- 3 整粒歩合は、早生品種では分施と同等であるが、晩生品種では全量基肥施肥が高い。玄米タンパク質含有率は、分施と同等～やや低い(表1)。
- 4 全量基肥施肥では、分施より移植 40 日後から幼穂形成期の葉色(SPAD)値が高く維持され、茎数は多めに推移する(図)。

[導入効果]

穂肥散布作業を省略できる。

[導入対象]

多収性品種を栽培する生産者

[留意点]

- 1 平成 30～令和2年に作物研究センター(細粒質グライ土)における5月上旬移植の試験結果である。
- 2 生育や収量構成要素のめやすは「稲作経営への多収性品種導入のすすめ」(新潟県農林水産部、令和3年3月)を参照する。

[具体的データ]

表1 品種・施肥別の収量、整粒歩合、玄米タンパク質含有率

品種	施肥	精玄米重 (kg/10a)	整粒歩合 (%)	玄米タンパク質 含有率(%)
ちほみのり	分施	698	60.0	7.5
	全量基肥	696 n.s.	61.9 n.s.	7.2 *
つきあかり	分施	719	55.6	7.4
	全量基肥	723 n.s.	52.3 n.s.	7.2 n.s.
あきあかね	分施	756	57.9	6.6
	全量基肥	737 n.s.	64.3 *	6.5 n.s.
みずほの輝き	分施	776	60.3	6.6
	全量基肥	725 *	67.4 *	6.3 *

注1 10a 当り施肥窒素量は、分施の基肥 7kg、穂肥 3 kg+3 kg(出穂期前 25+16 日) 全量基肥施肥 13 kg。使用肥料は、分施の基肥で塩加燐安、穂肥で硫安、全量基肥は表2の窒素配合割合の全量基肥肥料。

注2 平成 30～令和2年の平均値、n.s.:有意差なし * :P<0.05

表2 推奨される肥料の窒素配合割合(%)

肥料 タイプ	速効性	リニア型		シグモイド型		
		25日	40日	50日	70日	110日
早生用	17.0	27.3	—	32.3	23.3	—
晩生用	16.7	—	40.0	—	16.7	26.7

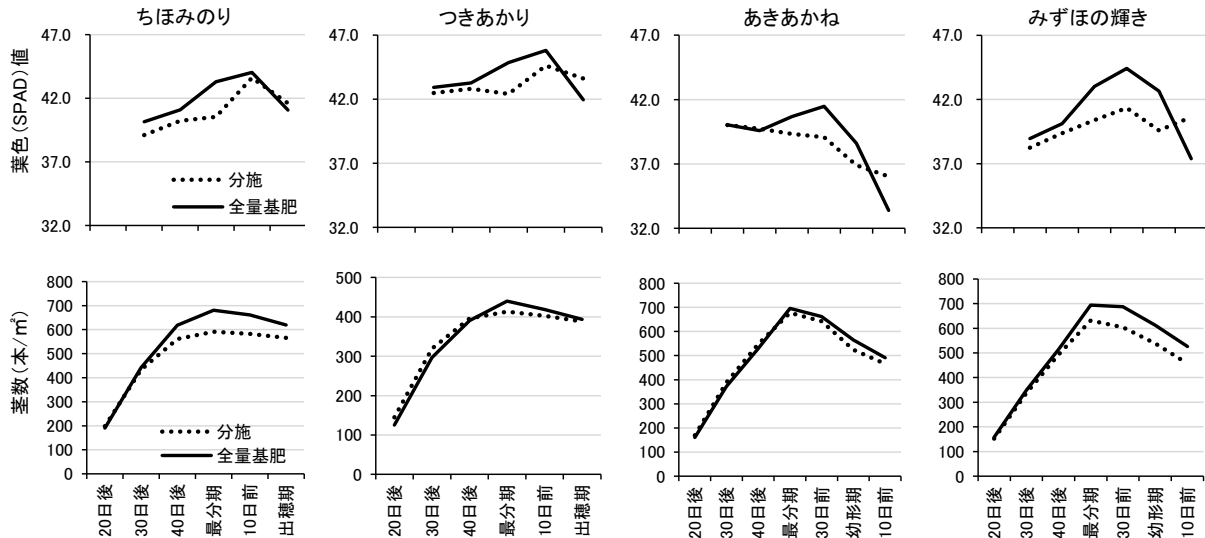


図 品種・施肥別の葉色 (SPAD) 値、茎数の推移

注 平成 30～令和2年の平均値、日数は移植後または出穂前の日数、最分期は最高分けつ期、幼形期は幼穂形成期。

[その他]

研究課題名:業務用米に適した多収性品種の安定多収栽培技術の確立

予算区分:県単政策(21世紀型)

研究期間:平成30～令和2年度

発表論文等:なし